

□災害活動と消防団

豊岡市防災監 北 垣 哲 夫

1. 水害の現実

2004 年は、豊岡市民にとっては大水害とともに記憶に残る年でした。

10 月 20 日、日本各地で猛威をふるっていた台風 23 号の接近に伴う豪雨により、円山川の堤防が決壊し、これまでに経験をしたことのない大きな被害を蒙りました。

もともと豊岡市は市街地の大部分が河川堤防より低く、古来より洪水の常襲地で、台風などの大雨に見舞われた際には、ポンプで雨水を強制的に川へ排水することにより市街地を冠水の被害から守っていました。

永年築きあげてきたポンプによる雨水の円山川への排水、これが市街地を冠水の被害から守る唯一の方法でしたが、台風 23 号ではこの冠水対策を行なうことが出来ない事態に陥ることとなりました。

20 日の夕刻、避難勧告から避難指示へ切替えた緊迫した状況の中で雨は止むことを知りませんでした。午後 7 時半前に排水ポンプを管理している部署の職員が顔中に脂汗を浮かべて「市長、排水機を止めてもいいですか」と市長に排水機の停止の判断を求めてきました。「これ以上内水を円山川

本流にかい出すと堤防が危ない」と言うのです。

河川の堤防には、耐えられる水位が設計上決められており、この水位を超えると堤防がいつ切れてもおかしくない状態になります。今回の台風 23 号ではものすごい勢いでその限界に迫りつつあり、止む得ずポンプを停止させる決断をせざるを得ませんでした。

排水機は止まり、内水の急上昇によってまちは水浸しになりました。

市街地の冠水を覚悟で排水機を停止させたにもかかわらず、円山川の水位は急上昇を続け、午後 11 時過ぎ、ついに堤防が決壊し、暗闇の中で濁流が市民を襲いました。

決壊した堤防の近くでは、逃げ遅れた市民が屋上から助けを求めています。自衛隊、海上保安庁、兵庫県にヘリコプターの出動を要請しましたが、夜間でしかも暴風雨の中「出動できない」という返事でした。

翌朝、目の前には泥の海に沈んだ自分達のまちがありました。機能不全、支え合う人々、長い闘いの始まりでした。

死者 7 名、床上浸水以上約 5,000 世帯、災害ごみ約 36,000 トン。その数字の背後に

市民の途方も無い苦しみが横たわることとなりました。

豊岡市にとって未曾有の災害を乗り切ることは、消防団の力なくしては決して出来なかったものです。

2. 分団長が見た災害現場から

分団長は、この年は日本本土に台風が数多く上陸するという稀に見る台風の当たり年で、今回の台風の前にも 21 号、22 号と立て続けに襲来を受けたばかりで、災害発生の危機感を持っていました。

この日の夕方 4 時頃、市の防災行政無線が市民に避難の場所や交通機関の状況を知らせていました。これまでの台風では幸いにも大きな被害がなく過ぎていったことや、これまでも浸水被害が度々あった土地柄のため、この時点では住民にもあまり危機感がありませんでした。

ところが今回の台風は以前のものとは少し様子が違い、収まるどころか雨はさらに激しさを増し、田山川の水位はかつてない程の速さで上昇を続けていました。

分団長は、これは大変な事になると直感し、午後 3 時頃に消防団の詰所につけついたら、やはり、ただ事では済まないと思った分団の幹部団員も続々詰所に集まってきました。午後 6 時頃に全分団員に招集を掛けました。既に自分の家が水に浸かってしまった団員を含め、すぐに半数以上の団員がかけつけてくれました。

ある消防団員は、足腰が弱くてとても避難所まで行けなかった母親をとりあえず自

宅 2 階に避難させ「ここから動くな」と言い残して消防活動に参加してくれました。

その時、母親からは消防活動に行こうとしている息子に「消防と私とどっちが大事なの？不安だからここに居て」と言って引き留められましたが、黙って消防活動に参加してくれたそうです。

分団の詰所では、分団長を中心に分団の管轄する 9 地区の、災害対応の検討を行いました。

3つの地区から土嚢積みの要請を受け、現場に向かいましたが、辺りは湖のようで危険すぎて結局思うような活動もできませんでした。

そのうち、「子ども連れの家族を救出して欲しい」との要請を受け、消防自動車現場に向かいました。その途中、気にかけていた高齢者世帯夫婦のことが心配になり、防災訓練で小学校に担架があることを思い出し、それを使って避難所まで運びました。

また、産気づいた人や、停電時に酸素ボンベが必要な人などを病院までボートで搬送しました。

このような人命優先の緊迫した状況の中、避難所である公民館前は通行止めで行き場を失った車で渋滞し、消防団員が交通整理などしなければなりません。

さらには収穫したばかりの倉庫の「米を動かして欲しい」という依頼もありましたが、人命救助で精一杯で、とても対応する余裕はありませんでした。

一方、避難所となっている公民館には、夜 10 時の時点で 95 人の市民が避難していました。避難所では「あの人が居ない」「私の息子は無事かしら」など、家族や知人の安否

を心配する声が数多くあがり、市の職員が即席の「おたずね掲示板」を作成しました。

これを元に消防団が安否の分からない人を探しに出かけましたが、出身地区以外の人は顔が分からないので大変苦労しました。

円山川の堤防の決壊は、夜 11 時 15 分頃に消防無線で知りました。堤防が決壊してからの対応は、本当に大変でした。

まず、夜間に屋外に出ると大変危険なことから、公民館へ避難している人を外に出さないよう団員に徹底させ、外へ出ている人があったら、とにかく家の中へ入り、2 階や高いところへ避難するよう呼びかけを行いませんでした。

堤防の決壊から 2 日後、まだ水が引き切れない地域で自宅に取り残されている人たちの救助に消防団と自衛隊で向かいました。

ボートでの救助に向かう際に分団長は、自衛隊員に「救助を拒否する人には住所と名前を聞いた上で、今後は救助に来ないという事」を伝えるよう頼みました。

これは、自衛隊員がいなくなった後に再び救助を求められても自衛隊のように交代要員もなく、2 日間不眠不休の活動で、疲労困憊で、しかもボートの数にも限界があり何度も救助に行くことができない消防団員の疲れによる 2 次災害を心配してのことです。

多くの取り残された人たちをボートで救助しました。その中には息子を引き留めようとした消防団員の母親の姿がありました。

堤防の決壊から 3 日後の 22 日の朝 10 時頃、その母親はやっと屋根づたいのボートに救出され、救出まで 2 日間、誰も声をかけたり救いの手を差し伸べてくれることが

無かったようで、救出された時に「元気か P」「大丈夫か P」と声をかけてもらって「ああ、私の事を心配してくれる人がいたんだ」と、本当に感謝したそうです。

家族のいる公民館で孫の顔を見た途端に緊張の糸が解け、消防団員の招集を掛けた分団長に「息子が消防団員でなかったら不安な思いもしなかっただろうし、テレビのひとつも助かったのに」とつい不満が口に出たそうです。

しかし、息子達が消防団の作業中に流されそうになった事や危険の中で多くの人命を救った事を知り、「自分の息子が消防団員だったから家財は全て駄目になったけど、自分の命があったのも息子と同じように地域のために家族を振り切って出動してくれた多くの消防団員のおかげ」と、今では、地域のために働いた息子達、消防団を本当に誇りに思っています。

洪水の水が引くと、今度は泥との戦いが待っていました。……

3. 心も支える消防団

市では、この災害を通じて、行政の限界を知り、自分達の力の及ばない、大きな自然の力を知ることになりました。そんな時、地域を災害から守るためには地域の消防団だけでは無く、地域の皆さんが協力しなければならない事が改めて分かりました。

災害に対する備えとして、自分でできる事と人に対してできる事を考える…地域みんなで助け合う事が重要です。そのためには普段から人と人のつながりが大切です。

水害の2年前、高齢者の把握をしておきたいと消防団員が民生委員さんに尋ねたところ、「プライバシーで教えられない事になっています。」と言われたそうです。これでは地域の実態がわかりません。地域のどこで助けを必要としている人がいるかということ、常に把握しようと努力しているのは消防団員です。

こうした地域に密着した地道な活動は、他の地域からの応援部隊では決して行なうことのできない事で、消防団をはじめ、自主防災組織、子ども会、老人会、民生委員、自警団など地域が一体となった活動が必要となります。

また、今回の台風23号では交通整理なども消防団員が行っていましたが、避難さ

れている方々も避難所の中でただ待つのではなく、自分達で出来ることは率先して行なって欲しいものです。近所の人々が声をかけあって避難する、自分で食料や毛布を持ってくる、全てを他人に任せるのではなく、自分達で出来ることをそれぞれが考えて欲しいものです。

当時、地域の多くの社会資本を失い、全ての人々が絶望の淵に立たされる事になりましたが誰も恨む訳にもいきません。嘆いていても始まりません。そんな時、消防団の方々から大きな力を頂きました。

地域の消防団があくまで人道的に行動してくれた姿が今でも目に浮かびます。…

消防団が住民の命を守る為、全力を尽くしてくれた姿は特に印象的でした。消防団



豊岡消防団操法訓練



豊岡消防団手話教室



梶原区自主防災組織の研修会



梶原区自主防災組織の土のう詰め

には夜も昼もありません。昨日も今日もありません。そんな消防団員の姿に感謝の涙を流した人がたくさんいます。その姿から自分も頑張ろうという、希望を見出した人も実はたくさんいるのです。

4. 消防団は地域の誇り

社会はともすれば自分が生きる事に精一杯で、周りに目を向けられなくなっているかもしれません。そのような中で地域のために役割を果たす消防団の活躍が、地域を再び立ち上がらせてくれたのだという事を知って頂きたいと思います。

自分の為だけでなく、地域の未来に希望を見出す絆と力を取り戻させてくれる消防団精神こそ、今の日本に必要なものだと固く信じます。

消防団員は、顔見知りの地域のよき一員です、頼もしい消防団員に限りない感謝を捧げつつ、各地で消防団の充実が進むことを期待してやみません。

もちろんプロである警察も消防も渾身の力で活動してくれました。しかし、警察と消防を合わせても人員は約 300 名。この人員だけで大災害を乗り切るのは不可能です。自衛隊も他の地域からの消防の応援隊も大きな助けとなりました。しかし、彼らは当然のことながらやがて帰っていきます。

豊岡市の消防団員は約 2,200 人。コミュニティの一員としてこのまちに暮らし続ける人々です。災害対策は総力戦であり、消防団員の存在が無ければ、この大災害を乗り切ることはできなかったと思います。

消防団と消防団員は、私たちの地域の誇りです。

備考:この寄稿は、当時、災害対応に当たられた方々の記述や発言を基に記述したものです。